

# 北海道方言-rasar 構文の表す捉え方

—認知文法の視点から—

氏家啓吾

keigo5525@gmail.com

キーワード： 北海道方言 認知文法 中間態 -rasar

## 要旨

北海道方言における-rasar 構文は可能・非意図・逆使役という大きく分けて三つの用法を持つとされ、近年特に逆使役用法について研究が進められてきた。本稿では認知文法の考え方を使得って-rasar 構文の意味構造を探る。この構文が Langacker のいう中間態 (middle voice)、すなわち因果的事態をベースとして、結果事象をプロファイルする捉え方を表すものであることを主張し、この構文の典型的な用法だけでなく、主語名詞句の指示対象の属性を表す場合や、先行研究では中心的に扱われてこなかった意図しない結果を表す場合も、この捉え方の異なる表れとして分析できることを示す。

## 1. はじめに

北海道方言には、動詞語根に接辞-rasar を後接して作る構文がある。本稿ではこの構文を-rasar 構文と呼ぶ<sup>1</sup>。-rasar 構文の例は、次のようなものである。

(1) 釘がやっと抜かされた。

この文はおおまかには「釘を抜こうとして、やっと抜けた」と言い換えられる。動作主が表現されず、対応する能動文（「ジョンが釘を抜いた」）における目的語が主語の位置にくるといふ文法的特徴がある。

この接辞は、一段系の動詞の場合 /-rasar/ がそのまま後接し、動詞語幹が子音で終わる場合、先頭の /r/ が脱落する。過去形およびテ形の形成の時に促音便が生じる点が使役接辞-sase や受身接辞-rare とは異なっている (佐々木 2007: 259)。したがって、「食べる」から「食べらさる」を、「書く」から「書かさる」を派生し、活用は「書かさって」、「書かさった」の形になる。生産性が高いが、すべての動詞に付加されるわけではない。形態論について詳細は佐々木(2007)、

<sup>1</sup> 本稿では、-rare を使った受動態の節を受動構文と呼ぶのと同じ意味で、このような V-rasar を主動詞とする節を-rasar 構文と呼ぶ。これはもちろん、形式と意味の組み合わせとしての構文である。なお、同じ対象を指して自発構文と呼ぶ研究もあるが、この名称は本稿では用いない。

Sasaki (2011)などを参照。なお、自動詞をもとにした-rasar構文も存在するが、本稿では他動詞をもとにした-rasar構文を対象にする。

先行研究では、-rasar構文には、大きく分けて逆使役 (anticausative)<sup>2</sup>、可能、非意図の3つの用法があると言われる。

- (2) 大きな丸が描かさってる。(逆使役)
- (3) このペンはよく書かさる。(可能)
- (4) 私は御飯が食べらさる。(非意図)

(佐々木 2015: 163)

上からそれぞれ、「大きな丸が描かれている(結果状態)」、「このペンはよく書ける」、「私はつい御飯をたべてしまう」と言い換えることができる。

まとまった先行研究として、山崎(1994)がある。これは北海道方言の-rasarの形態的・統語的・意味的特徴を詳細に記述したものである。山崎は用法の分類として「可能」、「自発」に加えて「非情物に出現する結果の状態」を提案した。「非情物に出現する結果の状態」用法の例として、以下の文が挙げられている。

- (5) a. 御飯炊かさった(炊き上がった)
- b. リボンほどかさってるよ(ほどけている)
- c. 洗濯物干かさった(干した状態になった)

(山崎 1994: 231)

Sasaki and Yamazaki (2006) はこれを踏まえて(2)を分析し、この用法の-rasarは「使役事象の削除」を標示するものであることを主張した上で、Haspelmath (1993)の自他対応の類型にしたがって「逆使役」という名称を提案した。その後さらに、佐々木(2007, 2015)、Sasaki (2012)などでこの逆使役用法についての研究が進められた。

円山(2007)は-rasar構文と韓国語の類似の構文、及び受身の-rareの三者の比較から、-rasarの意味を検討したものである。

先行研究は、-rasarがどのような時にどのような動詞から派生されるかを問う、語彙意味論的アプローチが主であった。それに対して本稿の目的は、-rasar構文の事態の捉え方(construal)を提示し、それによって-rasar構文の使われ方を分析することにある。

前半では、まず本稿が基づく認知文法(Cognitive Grammar)の枠組みを概観し、その中のLangackerのヴォイスの分類を紹介する。次に、先行研究による観察を整理する。次に問題提起として、意図的な行為の意図しない結果を表す場合に注目して、それがどのような性質の事態かを検討する。後半では、-rasar構文がスキーマ的意味構造として、Langackerの分類における

<sup>2</sup> 逆使役という名称はSasaki and Yamazaki (2006)、佐々木(2006, 2007)などによるもの。同じ対象を指して「非情物に出現する結果の状態」(山崎 1994)、「非情物主語の到達用法」(円山 2007)等と呼ぶ研究があるが、本稿では逆使役で統一する。

中間態 (middle voice) を表すものであることを主張する。意図的な行為の意図しない結果を表す場合も、この構文の背後にある事態の捉え方から分析できることを示す。また、英語の中間構文との相同性を指摘し、これらが異なる意味の広がりを持っていることを示す。

## 2. 認知文法の概観

### 2.1 認知文法の考え方

本稿が基づく認知文法は、Ronald W. Langacker が創始した言語理論である。この節では、本稿に関係する認知文法の重要な特徴を紹介する。なお、以下の記述は原則として Langacker (2008) に依拠する。

認知言語学一派である認知文法は、言語能力を一般的な認知能力と不可分のものであると考え、統語構造の自律性のテーゼを否定している。さらに、言語知識を構成するさまざまな言語単位 (linguistic units) が、すべて音韻構造、意味構造、及びそれらの組み合わせである記号構造から成っているとしている点が特徴的である。したがって、文法は自律的なものではなく、それ自体記号的な性質を持つ。つまり文法は、形式と意味の組み合わせ (form-meaning pairing) の集合体である。

また、語彙 (lexicon) と文法は連続体を成していると考えられる。そして、複雑さや抽象性において様々に異なるそれらの単位すべてが形式と意味の組み合わせであると考えている。この点は、Goldberg らの構文文法とも共通している。

認知文法では、言語表現の意味は概念化 (conceptualization) されたものであると考える。したがって、対象に対する概念化の主体 (conceptualizer) による捉え方 (construal) も、言語表現の意味の重要な一部である。

なお、以上のように認知文法は統語構造の自律性を否定し、意味を重要視するが、だからといって文法が意味から予測可能だと考えているわけではない。むしろ、意味から予測可能ではない慣習性という側面も言語の本質的特徴であると考えている。

### 2.2 プロファイル・ベースとトラジェクター・ランドマーク

認知文法による言語記述の重要な道具立てとして、プロファイル (profile) とベース (base)、トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark) がある。プロファイル (profile) とは、言語表現が何かを指示 (designate) すること、または指示されたものことである。たとえば、抽象的な意味において名詞は物を、動詞はプロセスをプロファイルする。そして、言語表現のプロファイルは孤立したものではなく、その言語表現によって喚起される概念内容の一部分である。その概念内容のことをベース (base) という。たとえば、「斜辺」という語は、三角形という概念内容を喚起し、その中の一部に注意を向ける (プロファイルする)。このとき三角形という概念内容がベースである。

動詞について言えば、英語の *come* と *arrive* は、共通のベースのうち異なる部分をプロ

ファイルするものとして分析される。どちらも「物が何らかの経路を通して着点に移動する」という概念内容をベースとして喚起し、その共通のベースのうち、come は経路を通ることを含んだ移動事象全体をプロファイルするのに対して、arrive は物が着点に到達するという局面だけをプロファイルするのである。

言語表現は大きく分けて、物または関係をプロファイルする。関係がプロファイルされるとき、その関係に含まれる物は参加者 (participant) と呼ばれるが、それぞれの参加者が異なる際立ちを与えられることがある。プロファイルされた関係の中で最も際立てられた、一番目の焦点 (primary focus) となる参加者はトラジェクターと呼ばれる。他の参加者が二番目の焦点 (secondary focus) とされる場合、それはランドマークと呼ばれる。

例えば、次の2つの文は同じ状況を指して言える場合があるが、(6a)では *the lamp* がトラジェクター、*the table* がランドマークとなっているのに対して、(6b)では *the table* がトラジェクター、*the lamp* がランドマークとなっている。

(6) a. The lamp is above the table.

b. The table is below the lamp.

一般に、文の主語は文がプロファイルする関係におけるトラジェクターを指示する名詞句に対応する。

### 3. 認知文法におけるヴォイス

#### 3.1 作用連鎖と意味役割

認知文法によれば、この世界は、物理的オブジェクトが多数存在し、それらが移動したり、それによって互いに影響を与え合ったりするようなものとして把握されている（ビリヤードボールモデル）。このとき、個体と個体の相互作用は、それらの間のエネルギー伝播として捉えられる。このエネルギー伝播としての事態把握を、認知文法では作用連鎖 (action chain) として図式化する (図 1)。それぞれの円は参加者を表し、二重矢印がエネルギーの伝播を表す。



図 1: 作用連鎖

さて、事態を把握する際の基礎となる、概念上の鋳型すなわち概念アーキタイプ

(conceptual archetypes) としての意味役割は、この作用連鎖における参加者の位置として規定することができる。

動作主 (agent) は、作用連鎖の最初に位置する参加者、つまりエネルギーを自ら発揮する参加者である。典型的には意志を持って他の物に働きかける。被動者 (patient) は、作用連鎖の終点の位置に来る参加者である。動作主の行為の影響を被る<sup>3</sup>。道具 (instrument) は、動作主と被動者の間に位置する参加者であり、動作主によって、他の物に働きかけるために使われる物である。

物同士の相互作用をエネルギーの伝播として見ることは、一方が他方に働きかけることによってそれに影響を与えるという事態、すなわち因果的事態 (causation) として捉えるということでもある。因果的事態は、動作主による他のものへの働きかけのプロセスと、それによる被動者の変化や移動といったプロセスに分析することができる。それぞれ、図 1 の二重矢印と一重矢印に概ね対応する。本稿では、それぞれ原因事象 (causing event)、結果事象 (caused event) と呼ぶ。例えば、「ジョンが窓を割った」という因果的事態に対しては、ジョンが窓に向かってボールを投げるなどの（ここでは指定されていない）プロセスが原因事象であり、それによって窓が割れるというプロセスが結果事象である。

### 3.2 Langacker の 4 種のヴォイス

Langacker によるヴォイスの議論を紹介する。一般的には、ヴォイスは主語・目的語といった文法関係と、動作主・被動者といった意味役割の間の対応関係を変える文法カテゴリとされる。認知文法ではこのことを、意味の観点から規定し直している。

たとえば、能動文「ジョンが窓を割った」では、動作主である「ジョン」が主語、被動者である「窓」が目的語である。一方、動詞に接辞-rare を付加した形で、同じ事態を描写する文「窓がジョンに割られた」では、被動者である「窓」が主語になり、動作主「ジョン」は斜格項となっている。このような場合、後者の文が受動態の文であるとされ、-rare がヴォイスの要素であるとされる。

このように、作用連鎖で表されるような因果的事態を一つの言語が幾通りもの仕方で概念化することができるわけであるが、その仕方を、①何をベースとし、その中の何をプロファイルするのか、②各参加者にトラジェクター・ランドマークという際立ちの順序をどのように配列するのか、という 2 つの観点から整理したものが、Langacker の提示する 4 種のヴォイスである (Langacker 2008: §11. 3)。つまり、ヴォイスは事態に対する捉え方の違いとして規定されるのである。

Langacker は、能動態他動詞 (active transitive)、中間態 (middle)、絶対自動詞 (absolute intransitive)<sup>4</sup>、受動態 (middle) の 4 つを挙げている。それぞれの事例は次のようなもので

<sup>3</sup> 本稿では単純化のために、被動者を状態変化も位置変化も含めた、動作主の行為によって影響を被る参加者として (Langacker の使い方より広い意味で) 使うことにする。

<sup>4</sup> ここで絶対自動詞とは、一般的に非対格自動詞 (unaccusative intransitive) と呼ばれるものと同じである。

ある。そして、それぞれの意味構造を作用連鎖として図式化したものが図2である。太い線で描かれた部分がプロファイルで、細い線で描かれた部分がベースのうちプロファイルされていないものである。

- (7) a. I opened the door. (能動態他動詞)  
 b. The door opened easily. (中間態)  
 c. The door opened. (絶対自動詞)  
 d. The door was opened. (受動態)

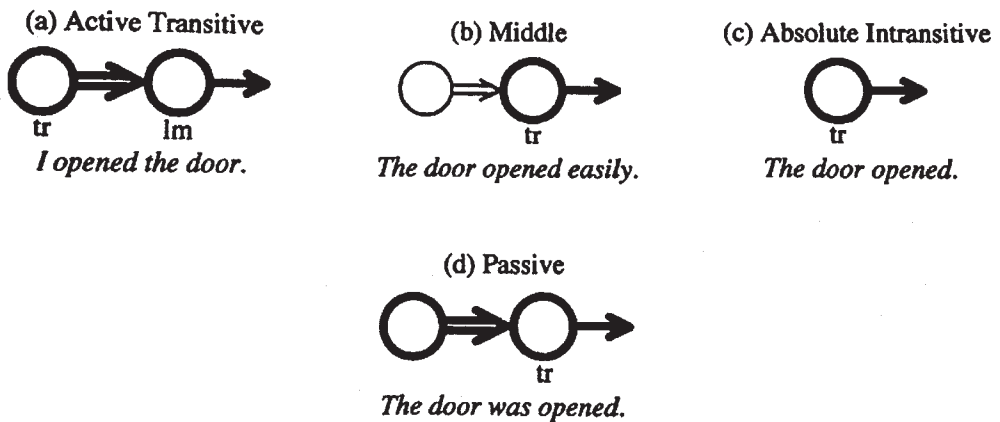


図 2: 4 種類のヴォイス (Langacker 2008: 385)

図 2 に示されているように、(a) の能動態他動詞文では因果的事態全体がプロファイルされていて、動作主がトラジェクター、被動者がランドマークを与えられている。日本語や英語などの動作主指向の (agent-oriented) 言語においては、これがデフォルトの配列である。

(c) の絶対自動詞の文では、動作主はベースにも存在せず、対象 (theme) に関するプロセスの部分だけがプロファイルされていて、唯一の焦点参与者である対象がトラジェクターを与えられている。つまり、このような場合では動作主や原因が (実際には存在したとしても) 考慮されず、概念化者は被動者に何が起こったかということを、自律的な事象として捉えていると言える。

(b) の中間態は、動作主とその行為を含んだ因果的事態をベースとして喚起するものの、動作主とその行為をプロファイルせず、結果事象だけをプロファイルしている。唯一の焦点参与者である被動者がトラジェクターを与えられている。つまり、被動者の変化や移動といった事象が、それを引き起こす因果的事態の一部として捉えられているのである。この点で、(b) の中間態は能動態他動詞文と絶対自動詞文の間の、中間的な捉え方だと言え

る。

以下、このような意味構造・捉え方を中間態、それを意味極に持つ構文を中間構文と呼ぶ。英語のいわゆる中間構文は、以上のような意味での中間態を表す構文の一つの事例である。英語の中間構文のように、多くの言語の中間構文で動作主が表現されないことは、動作主がベースに含まれないということの反映である。

(d) の受動態は、動作主の行為がベースにあるだけでなく、プロファイルされている。この点が受動態と中間態との違いである。受動構文では動作主を斜格項として表現する場合があるのは、動作主もプロファイルされているからだと考えられる。

#### 4. 先行研究による観察の整理

##### 4.1 逆使役用法

-rasar の用法は、3つに分類されることが多い。「逆使役用法」、「可能用法」、「非意図（自発）用法」である。

逆使役用法は、次の例のように、動作主は表現されず、動作の対象を主語に取る。つまり、結合価を減らす働きがある（佐々木 2007:260）。

(8) 大きな丸が描かさつてる。 (= (2))

Haspelmath (1993) による自他対応の類型では、多数の言語の自他対応を、他動詞と自動詞の形態的關係によって区別している。自他対応（起動動詞 (inchoative) と、その意味を結果事象として持つ使役動詞 (causative) の対)のうち、他動詞が自動詞に形態的な要素を付加した形になっているものが使役 (causative)、自動詞が他動詞に形態的な要素を付加した形になっているものが逆使役 (anticausative)、それらが同形なものが浮動 (labile) と呼ばれる。-rasar のこの用法は、他動詞に-rasar を付加することで自動詞を作ることから、Sasaki & Yamazaki (2006) 以降この分類に従って「逆使役」と呼ばれている。

逆使役用法については、いくつかの重要な特徴が指摘されている。まず、結果を必ずしも含意しない動詞からも派生することができ、その場合結果を補って解釈される（山崎 1994:231）。

- (9) a. お肉たたかさつた？（柔らかくなった？）  
 b. 手に持ってたら缶が振らさってしまった（振った状態になった）  
 c. 白菜には揉んでも揉まさらないのである（柔らかくならない）

(山崎 1994:231)

例えば (9a) は、結果を含意しない接触動詞の「叩く」が使われているが、叩いた結果柔らかくなったかどうかが問われている。したがって結果を含めて解釈されていると言える。

また、動詞と目的語の組み合わせが達成 (accomplishment) のアスペクトを持つような場合に派生されやすいということも指摘されている (佐々木 2015:185)。

また、日本語の語彙的自他対応については、他動詞の動作様態が指定されていない場合にそれに対応する自動詞が成立しやすい (北海道方言も同様である) が、次の例のように、*-rasar* は動作様態指定のある動詞からも派生される (佐々木 2015: 184)。

- (10) a. 壁が真っ白に塗らさってる。
- b. すそがきれいに縫わさってる。
- c. 床がきれいに拭かさってる。

(佐々木 2015: 184)

付言しておけば、動作様態指定のある動詞から派生されたとき、その動作様態指定は *V-rasar* でも保持される。そのことは、(11) の意味からわかる。テイル形ではない (11) は可能な文だが、この文の表す意味においては、他動詞「塗る」が持つ動作様態指定が保持されている<sup>5</sup>。

- (11) 壁が白く塗らさった。

「塗る」という仕方での事態が起こったのでない限り、この文は言えない。つまり、動作様態指定のある他動詞から派生されるだけでなく、なおかつその様態指定は保持されるのである。

*-rasar* を逆使役の通言語的研究 (Nedjalkov and Sil'nickij 1973, Haspelmath 1987, 1993) から見た場合、動作様態指定のある他動詞からでも派生されるという点で北海道方言は通言語的傾向から逸脱的なものだと佐々木は指摘している (佐々木 2015: 205)。

なお、佐々木は逆使役用法の例としてテイル形の例を主に扱っているが、本稿ではテイル形は対象とせず、単純な形の例を中心に考察する。というのも、テイル形から *-rasar* の意味を知るためにはテイルの意味的効果が明らかである必要があるからである。「ラサッテイル」の形の文を検討した場合、テイルの付加が持つ特定の意味的効果を前提として初めてそこから *-rasar* の意味が推論できるはずである。

#### 4.2 可能用法

可能用法と呼ばれるのは次のようなものである。

- (12) このペンはよく書かさる。 (=(3))

<sup>5</sup> (10) の各文のような、結果状態のテイル形の *V-rasar* では、*V* の様態指定が保持されている可能性もあるし、保持されていない可能性もある。いずれにせよ、*V-rasar* が *V* の動作様態指定を保持しているというここでの主張については、非テイル形の文を検討すれば十分である。



(13) このりんごは簡単に剥かさる。

このように可能用法においても、動作主が現れず、結合価が減少する(佐々木 2007: 260)。逆使役用法では主語は被動者であるのに対して、可能用法では(12)のように道具でも良いし、(13)のように被動者でも良い。

山崎(1994)は、この用法が行為の主体の能力を表す能力可能の場合には使えず、状況可能を表す場合にのみ使えることを指摘した(山崎 1994: 232)。なお、この用法で表されるのは状況可能の中でも特に主語の指示対象の属性による可能である。

さらに、円山(1994)は、次の事実を指摘している。

- (14) a. この靴は小さすぎてハカサラナイ。  
 b. \* この靴はデザインが悪すぎてハカサラナイ。

(円山 2007: 58)

どちらも主語の指示対象の属性に関するものであり、どちらも一種の可能である(「履けない」を使えばどちらも適格になる)にもかかわらず、(14a)は適格だが、(14b)は不適格である。円山はこの差を、前者は[-制御]、後者は[+制御]の状況であることによると考え、-rasarの可能用法は[-制御]の状況の時に限って使われると主張している(円山 2007: 59)。

本稿の立場では、ここで可能用法と呼ばれているもの、すなわち主語の指示対象の属性を表すものは、道具主語の場合があるという特異性はあるものの、逆使役用法と呼ばれる用法の一つの使い方に過ぎないと考えている。

#### 4.3 非意図(自発)用法

非意図(自発)用法と呼ばれるのは次のようなもので、「つい～してしまう」、「仕方なく～する」と言い換えられる<sup>6</sup>。

- (15) 私は御飯が食べらさる。 (= (4))  
 (16) バスもタクシーもなく、円山から西野まで歩かかった (山崎 1994: 231)

この用法では格フレームは変わるものの対応する能動文の結合価はそのまま保たれる(佐々木 2007: 260)。

ただし、非意図用法・自発用法という名称には注意が必要である。というのも、この「つい～してしまう」、「仕方なく～する」というような用法では、ある意味においては動作

<sup>6</sup> なお容認度のレベルでは、筆者(北海道十勝地方出身、20代)の内省では、この用法に分類されるものは容認されない。地域差・世代差が影響していると思われる。

主の意図があるからである。というのも、「食べる」や「歩く」といった行為は、これらの例の場合では意図的になされている。つまり、夢遊病にかかっているような状況ではなく、自ら手や足を動かして行為を行っている。したがってここでいう非意図・自発というのは、たとえば柴谷（2000）の言う意味での自発、すなわち次のような、動作主の意図によらずプロセスが生起している場合とは異なる。

- (17) 尼ども食べ残して採りて多く持ちけるをその茸を、「死なむよりは、いざこの茸乞ひて食はむ」と思ひて、乞ひて食ひける段より、またきこり人どもも、心ならず舞はれけり。（今昔物語）

（柴谷 2000: 167）

「舞ふ」というプロセスが、ここでは茸の効果によって、本当に動作主の意図なしで生起しているのである。つまり、夢遊病的な状況である。(15)、(16)における「意図のなさ」は、(17)とは性質が大きく異なる。

#### 5. 問題提起：意図的な行為の意図しない結果を表す場合

先行研究では、「逆使役用法」と「非意図（自発）用法」は一貫してはっきり区別されている。そのことによって、次に挙げるような、それら両方の性質を持つかもしれない例が、現状では分析の主要な対象から外されているように思われる。

- (18) 変な字が書かされた。 (cf. 山崎 1994: 228)  
(19) ドを弾こうとしたのにレが弾かされた。 (円山 2007: 56)  
(20) 卵が割らされた。

これらはすべて、「～しちゃった」と言い換えられるような、意図に反することが生じたことを含意する表現である。この節では、これらが特に「意図的な行為の意図しない結果」を表すものであることを示す。

まず、(18)は「字を書いたら変な字になっちゃった」とおおまかに言い換えられる。この文は、出来事が動作主の意図に沿っていないという点が特徴的である。詳しく述べる。

比較対象として (1) を考える ((21)として再掲)。

- (21) 釘がやっと抜かされた。

こちらは〈①動作主が釘が抜けることを意図して釘に対して行為をして、②その結果その意図の通り釘が抜けた〉という事態を表現していると言える。それに対して (11)は〈①動作主が(字を書くという)意図をもって行為をして、②それにより字が書かれたものの、

失敗して意図とは違う「変な字」が書かれてしまった」という事態を表現している。つまり、書くという行為がなされてはいるが、意図していた結果と実際の結果にずれがある事態と言える。

(19) は、「ドを弾こうとしたのにレを弾いちゃった」と言い換えられる。これは〈①動作主が(ドを弾くという)意図をもって行為をしたが、②失敗してレの鍵盤を押してしまったために、意図に反してレの鍵盤が弾かれてしまった〉という事態だと言える。以上の2つは「意図的な行為を行ったが、意図と結果にずれがある事態」である。(20) はそれらとはまた別の種類の事態である。

(20) は「卵を(うっかり)割ってしまった」と言い換えられる。インフォーマント調査でこの文が適切な状況をたずねると、次のような返答が帰ってきた。お盆をテーブルに置いたら、近くにあった卵にぶつかって、卵が割れたという状況でなら言える、と。つまり、卵が割れるという意図しない事態が、意図的な別の行為の結果起こった場合に使われるのが適切ということである。この直観は母語話者である筆者も共有する。絶対自動詞「割れる」を使った文では、このような特異な解釈は出ないと思われる。

このことから、(20) は〈①動作主が意図をもってある行為をして、②その行為による思いがけない結果として卵が割れた〉という事態を表現していると言える。ここまでの例と違うのは、行為が失敗したことで意図しない結果が起こっているのではなくて、ある先行する行為による思いがけない結果として、語幹の動詞が表す出来事が起こっている、ということである。

(18) では、変な字が書かれたことの原因となっているのは、「書く」が表す行為と違うものではない。「書く」が失敗したためにそれが起こったのである。それに対して(20) では、卵が割れたことの原因となったのは「割ろうとした」とは言えないような行為である。この点が(20)の特徴だと言える。

以上から、(18)-(20) のような例は、「意図的な行為の意図しない結果を表すもの」としてまとめられる。これらの重要な特徴は、それに先行する行為があるとは言え、言語表現はあくまで結果の事象を指し示しているということである。

これらの例は、形式的には佐々木の言う「逆使役」に含まれると思われる。なぜなら、逆使役用法の定義が、他動詞から派生されていて、結合価が減り、動作主が標示されないというものだとすれば、それに十分当てはまっているからである。

しかし同時に、意味の上では、これらの例は逆使役用法の先行研究では指摘されていない、以上のような特異な意味を持っているのである。少なくとも佐々木による一連の研究では、この特異な意味を持つ例は明示的に扱われてはいない。このことは、佐々木が挙げる例が結果状態のテイルを伴うものが主であることが一つの原因だと思われる。というのも、結果状態のテイルがついた形ではこの「意図的な行為の非意図的な結果」の意味は出

ないからである<sup>7</sup>。

また、これらは「非意図用法」（または「自発用法」）と呼ばれるものとも異なる。というのも、そのように呼ばれる例「私は御飯が食べらさる」、「バスもタクシーもなくて丸山から西野まで歩かかった。」などにおける非意図性はそれぞれ「つい～してしまう」、「仕方なく～する」とそれぞれ言い換えられるようなものだが、これらは上で述べた「意図的な行為の意図しない結果」とは明らかに性質が異なるからである。

(18)-(20)のような例は、逆使役用法と呼ばれるような特徴も持ちながら、非意図用法と呼ばれる例との類似性も認められることから、はっきり分けられてきたこれら2つの用法の間をつなぐような位置にある可能性も考えられる。本稿ではこれらの例に注目して、-rasar 構文の意味構造から、「意図的な行為の意図しない結果」という意味がどうしてこの構文と結びつくのかということ进行を明らかにする。

## 6. 分析: -rasar 構文はどのような捉え方を表すか

### 6.1 -rasar 構文のスキーマ的な意味構造

まず、次の-rasar 構文の意味構造を考えてみよう。

(21) 釘がやっと抜かされた。 (=(1))

この文はおおまかには「釘を抜こうとして、やっと抜けた」と言い換えられる。動作の対象を主語にとり、動作主は表現されない。能動態の文と比較しよう。

(22) ジョンが釘を抜いた。

まず、この能動文は、次のような作用連鎖で描くことができる。

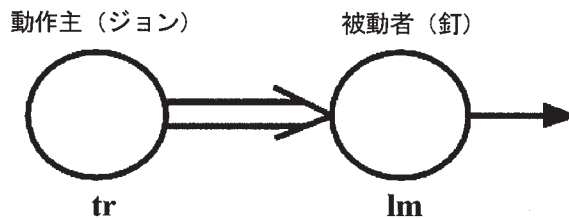


図 3: (22) の作用連鎖

動作主と被動者（釘）の2参加者間の因果的事態がプロファイルされている。二重矢印が原因事象である（引っばるなどの）動作主の行為を表していて、一重矢印が被動者に生じ

<sup>7</sup> これは、このテイル形はあくまで結果状態を指示しているため、そこでは行為そのものがある程度希薄化されているからかもしれない。例えば、通常-rasar 構文は動作主が話し手の解釈が自然であるのに対して、結果状態のテイル形の場合はそのような傾向はない。この事実も、その反映であるかもしれない。

た〈釘が抜ける〉という結果事象を表している。能動態では動作主が主語になり、「釘」が目的語になる。つまり、動作主がトラジェクター (tr) を付与され、被動者「釘」はランドマーク (lm) を付与される。

それに対して、(21) の-rasar 構文ではどうだろうか。ここでも、表現されていない動作主（この場合は話し手）による行為と、その結果としての被動者の変化がある。したがって、ベースにある事態は〈釘を抜く〉という因果的事態であり、能動態の場合と同じだと考えられる。なおかつ、動作主とその行為はプロファイルせず、「釘」に起こった結果事象だけをプロファイルしている。そして、プロファイルされた関係の唯一の参与者である「釘」がトラジェクターを与えられている。したがって次のような作用連鎖として描ける。細線がベースにありプロファイルされていない部分で、太線がプロファイルされている部分である。

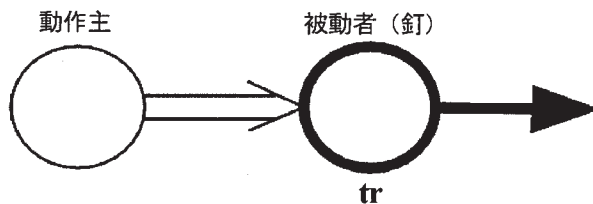


図 4: (21) の作用連鎖

これは、3節でみた、Langackerのヴォイスの分類における中間態の意味構造と一致する。したがって (21) のような典型的な-rasar 構文は Langacker のいう意味での中間態の意味構造、すなわち、動作主とその行為を含んだ因果的事態をベースとしてそのうちの結果事象をプロファイルするという捉え方を意味として持つ構文であると言える。

本稿では、(21) のような例が-rasar 構文の典型例だと想定している。これは佐々木の枠組みでは、「逆使役用法」に含まれるものである。さらに、図 4 の作用連鎖に示した意味構造は、-rasar 構文の他の使い方にも当てはまるスキーマの意味構造である。

ところで、(21) は副詞「やっと」が付加されているが、これは付加されている方が自然である（仮にない場合も、その解釈のほうがより自然である）。これは、動作主が釘に対する（引っぱるなどの）働きかけをしても、ただちには（釘が抜けるという）結果事象が生じず、時間や何らかの努力を経てからそれが生じたという状況である。そのような状況の方がこの文が自然になるのはどうしてだろうか。

それは、結果事象が行為の開始から時間的に離れていることが、その事態に-rasar 構文の捉え方、すなわち結果事象だけに注目する捉え方を適用することの、一つの動機付けになっているからだと考えられる。

詳しく述べる。3節で述べたように、日本語において因果的事態に対するデフォルトの捉え方は能動態であるから、そうではなく中間態の捉え方を適用することの背後には、何らかの動

機付けがあると思われる。ところで、因果的事態はプロトタイプカテゴリーをなし、特にそのプロトタイプ、つまり典型的に使役構文で表わされる事態では、原因事象と結果事象の結びつきが強い傾向があるということが知られている (Lakoff 1987, 西村 1998 など)。(21) の状況のように、原因事象の開始と結果事象の間にある程度の時間や努力があることは、プロトタイプ的な因果的事態から多かれ少なかれ逸脱していることである。ここではこのような事態における逸脱性が、中間態の捉え方を適用することの動機付けになっている。そのため、(21) では「やっと」が付加された解釈が自然なのである。

## 6.2 意図的な行為の意図しない結果を表す場合

この節では5節で扱った次のような例が、-rasar のスキーマ的意味構造によって説明できることを示す。

(22) 変な字が書かされた。 (=(18))

(23) 卵が割らされた。 (=(20))

これらは、動作主による意図的な行為の意図しない結果を表すものと特徴づけられた。その中でも、(23) は行為に失敗したために意図しない結果が生じる場合で、(24) は別の行為 (「机にお盆を置く」など) が原因となって、思いがけない結果が生じる場合であった。

これらのような場合も、因果的事態をベースとしてその結果事象をプロファイルするという -rasar 構文のスキーマ的意味構造が当てはまる。(22) では、ベースとなる因果的事態は〈動作主が (字を書くという) 行為をして、意図に反して変な字が書かれた〉という事態であり、そのうちプロファイルされているのは〈変な字が書かれた〉という結果事象である。(23) ではベースとなる因果的事態は〈動作主が何か行為をして、その思いがけない結果として卵が割れた〉という一連の事態であり、そのうちプロファイルされているのは〈卵が割れた〉という結果事象である。

このような〈動作主が行為をして、意図しない結果が生じる〉という事態に対して、中間態の捉え方が適用されるのは、どのような動機付けによるものだろうか。

(21) の場合と同様にここでも〈動作主が行為をして、意図しない結果が生じる〉という事態を持つ、因果的事態の典型からの逸脱が動機付けとなっている。

因果的事態 (およびそれを表す使役構文) のプロトタイプは、動作主が意図的な行為をして、その意図通りの結果事象が起こったようなものである。意図しない結果を表す次のような使役構文は、このプロトタイプからの拡張的用法である (西村 1998: 162-163)。

(24) 太郎は友達とキャッチボールをしていて窓を壊した／壊してしまった。

(西村 1998: 162)

ここでは、動作主の意図的な行為によって思いがけない結果が生じている。つまり、動作主はキャッチボールという意図的な行為を行ったが、窓が壊れることを意図していたわけではない。その行為の思いがけない結果として窓が壊れるということが生じたのである。ここでの「太郎」は、結果事象を意図してはいないという点で、非典型的な動作主であると言える。

この構造は、(23)の事態と一致する。ここでも、動作主は意図的な行為を行ったが、卵が割れることを意図していたわけではない。その行為の思いがけない結果として卵が割れるということが生じたのである。以上から、(23)のベースにある事態は因果的事態であるとはいえ、その動作主は動作主の典型例からは外れているものだと言える。

このように、因果的事態における動作主が、動作主の典型例からは外れた特徴を持っているということが、その事態に対して中間態の捉え方、すなわち動作主とその行為をプロファイルせず結果に注目するという捉え方を適用する動機づけになっていると考えられる。以上、意図的な行為の意図しない結果を表す場合も、-rasar構文のスキーマ的な意味構造から説明できることを示した。

ここまでの分析から、-rasar構文の意味においては、ベースにある動作主の行為（原因事象）が重要な役割を果たしているということがわかる。4節で述べた、動作様態指定のある他動詞からも派生されしかもその様態の指定が保持されるという事実や、そもそも働きかけだけを表し結果を意味に含まない動詞（「叩く」など）からも派生されるという事実も、そのことの一側面であると考えることができる。これらの性質は、「逆使役」として捉えた場合には通言語的傾向からの逸脱とされるのだったが、そうではなく Langacker のいう意味での中間態というカテゴリーとして捉えるならば、本稿の分析が正しければそれはむしろ自然なものなのである。

## 7. 英語の中間構文と-rasar 構文

英語のいわゆる中間構文も、Langacker のヴォイス分類としての中間態を表す構文の一事例である。

(25) This ice cream scoops out quite easily.

(Langacker 1991: 334)

典型的な英語の中間構文は、動作主ではない参加者を主語に取り、意味としては主語名詞句の指示対象が動詞の表す行為の成否を決定するような属性を持つものであることを表す (Yoshimura and Taylor 2004、本多 2014 など)。また通常動作主は不特定であり表現されない。

-rasar 構文もこれと同様に、主語の指示対象が（語幹の）動詞の表す行為の成否を決定するような属性を持つものであることを表す場合がある。先行研究では「可能用法」と呼ばれているものである。

(26) このコップは簡単に洗わせる。

これはおおまかには「このコップは洗うと簡単にきれいになる」と言い換えられる。ここでは動作主は不特定であり表現されておらず、主語名詞句の指示対象が「洗う」という行為を成り立たせるような属性を持っていることを表している。

-rasar 構文の意味構造は、因果的事態をベースとして持ちながら動作主とその行為をプロファイルせず、結果事象だけをプロファイルするというものであった。結果事象だけがプロファイルされるため、プロファイルされた唯一の参与者である被動者がトラジェクター、すなわち一番目の焦点参与者の地位を付与される。

主語名詞句の指示対象が、語幹の動詞の表す行為の成否を決定するような属性を持つものであることを表現するこのような-rasar 構文の使い方は、前述した-rasar 構文のスキーマ的意味構造の一つの反映であると考えることができる。なぜなら、事態の成立の可能性を特定の参与者の属性に帰属するということは、その事態の最も際立った参与者(=トラジェクター)としてそれを捉えることに他ならないからである。例えば、何か「洗う」という行為を成り立たせるならば、〈誰かがそれを洗って、それが綺麗になる〉という事態がベースとして喚起されるのであり、またその可能性を「このコップ」の属性として捉えることは、「このコップ」を中心としてその事態を捉えることである。このように考えれば、主語名詞句の指示対象が持つ行為の成否を決定するような属性を表す用法が中間態の意味構造の一つの反映であるとするには十分な理由があると思われる。

-rasar のこのような用法と、英語の中間構文との間には、数多くの類似性が見られる<sup>8</sup>。形態的標示があるかないかという違いを別にして、意味に注目するならば、これら2つの構文は各言語の対応する構文であると言っても良いだろう。

例えば、英語の中間構文は被動者だけでなく、道具主語が可能であることが知られている。

(27) This knife cuts well.

(Yoshimura 1990: 497)

ここで主語 *this knife* の指示対象は、cut という事態において道具の意味役割を持つ参与者である。

これにちょうど対応するような例が北海道方言-rasar 構文についてもよく知られている(山崎 1994)。ここでも主語「このペン」の指示対象は、「書く」という事態において道具の意味役割を持つ参与者である。

<sup>8</sup> 本多 (2005) は英語の中間構文の意味をアフォーダンス、探索活動といった生態心理学の概念を使って分析したものである。そこでは英語の中間構文に見られる多数の制約がこれらの概念によって説明されているが、その説明は-rasar 構文のこの用法についてもそのまま当てはまると思われる。



(28) このペンはよく書かさる。 (=3)

他にも、難易を表す副詞節や否定と共起しやすいという事実などが共通している。

ところで、英語の中間構文はこのような可能性を表す用法が典型的であって、一回的な出来事を表す例は、次のようなものが存在するものの、全体としては少ない<sup>9</sup>。

(29) The door opened easily. (=7b)

(30) This car drove nicely when I tried it yesterday. (本多 2005: 71)

一方北海道方言-rasar 構文は、ここまで挙げてきたように、一回的な出来事を表す文が多数ある。

したがって英語の中間構文と-rasar 構文を、中間態という一般的なヴォイスを表す構文の2つの事例として考えると、英語の中間構文は、属性を表す用法に限って使われる点特徴的である。つまり、中間態の意味構造に付随する「因果的事態を動作主でない参加者に着目しその属性として描写する」という一つの側面が特に色濃く出た構文だということである。英語と日本語北海道方言の対応する構文が、異なる意味の広がりを持っていると言える。

## 8. まとめ

-rasar 構文のスキーマ的意味構造を Langacker のヴォイスの分類を使って特徴づけた。この構文は、動作主の行為の含む因果的事態を喚起しながら、被動者に生じた結果事象に注目するという捉え方、つまり Langacker のいう中間態の意味構造を表すものである。また、先行研究では分析されてこなかった、意図的な行為の意図しない結果を表す場合が存在することを指摘して、それをスキーマ的意味構造から説明した。このような場合には、因果的事態に対して結果事象に注目した捉え方を適用することの動機づけが生まれるのため、-rasar 構文が使われるのである。このように、この構文を中間態として捉えると、逆使役の通言語的類型から見ると逸脱的な面も自然に説明できる。加えて、英語の中間構文と-rasar 構文との相似性を指摘し、かつ意味の広がり互いに異なっていることを示した。

## 参考文献

Haspelmath, Martin (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. Bernard

Comrie and Maria Polinsky (eds.) *Causatives and Transitivity*, 87-120. John Benjamins.

本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版会。

<sup>9</sup> 英語の中間構文のこの問題については、本多 (2005: 70-73, 86-88) を参照のこと。

- 本多啓 (2014) 「プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考」『神戸外大論叢』64, 15-44.
- Lakoff, George (1987). *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 円山拓子 (2007) 「自発と可能の対照研究—日本語ラレル、北海道方言ラサル、韓国語cita」『日本語文法』7, 52-68.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹 (共著) 『日英語比較選書5 構文と事象構造』162-177. 東京: 研究社出版
- Nedjalkov, V. P. & Sil'nickij, G. G. (1973) Typologie der kausativen Konstruktionen. *Folia Linguistica*, 6(3-4), 273-290.
- Sasaki, Kan (2011) Syllable deletion as a prosodically conditioned derived environment effect, William McClure (ed.) *Japanese/Korean linguistics* 18, 214-225. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Sasaki, Kan (2012) Anticausativization in the Hokkaido dialect of Japanese. 『アジア・アフリカの言語と言語学』7, 25-38, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 佐々木冠 (2007) 「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨 (編) 『他動性の通言語的研究』259-270. 東京: くろしお出版.
- 佐々木冠 (2015) 「北海道方言における形態的逆使役の類型論的位置づけ」中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦 『認知類型論』163-211. 東京: くろしお出版.
- Sasaki, K. and A. Yamazaki (2006) Two types of detransitive constructions in the Hokkaido dialect of Japanese. *Passivization and typology: Form and function* 352-372. Amsterdam: John Benjamins.
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」仁田義雄他 (編) 『日本語の文法1: 文の骨格』117-239. 東京: 岩波書店
- 山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞 -rasaru の用法とその意味分析」『ことばの世界』(北海道方言研究会20周年記念論文集) 北海道方言研究会, 227-237.
- Yoshimura, Kimihiro (1990) A study of verbs in the active-passive constructions, *Linguistic Fiesta: Festschrift for professor Hisao Takehi's sixtieth birthday*, Tokyo: Kuroshio, 495-512.
- Yoshimura, K. and Taylor, J. R. (2004) What Makes a Good Middle? The Role of Qualia in the Interpretation and Acceptability of Middle Expressions in English. *English Language and Linguistics*, 8 (2), 293-321.

# The Construal Associated with the *-rasar* Construction in the Hokkaido Dialect: A Cognitive Grammar Perspective

Keigo UJIE

keigo5525@gmail.com

Keywords: Hokkaido dialect, Cognitive Grammar, middle voice, -rasar

## Abstract

The Hokkaido dialect of Japanese has a construction involving the productive verb suffix *-rasar*, which is commonly viewed as having three main uses: potential, unintentional, and anticausative. This paper argues, from the viewpoint of Cognitive Grammar, that *-rasar* construction is a kind of middle construction, in the sense that it evokes causation as its base and profiles the caused event. It is further maintained that the semantic structure of the middle voice is reflected in the uses of this construction, including those that have been largely neglected in previous studies, i.e. highlighting some property of the referent of the subject and focusing on an unintended result of a volitional action.

(うじえ・けいご 東京大学大学院)